

長 谷 貝 塚

1988.3

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告書第61冊

『長谷貝塚』正誤表

頁	行	誤	正
例言	3	兵庫豊岡土木事務所	兵庫県豊岡土木事務所
目次	3	第2節長谷貝塚の調査…1	第2節長谷貝塚の調査…2
17	6	細文	縄文
27	26	特に、中津Ⅱ式	特に、長谷貝塚①は中津Ⅱ式
27	27	空間を描出	空間へ描出
28	20	8) 豊岡市教育会	8) 豊岡市教育委員会

序 文

兵庫県但馬地方は縄文時代の遺跡の宝庫とされ、今でも自然環境にめぐまれた地域であります。

昭和34年、豊岡市長谷の地区防火水槽掘削時にヤマトシジミを中心とする貝層が発見され、土器や石器とともにイノシシの骨などが出土し、縄文時代後期（約3500年前）の貝塚として周知されていました。

昭和61年度、兵庫県豊岡土木事務所が一般県道香住大谷線の道路改良工事を施行するにあたり、兵庫県教育委員会が長谷地区の協力を得て、小規模の発掘調査を行いました。その結果、縄文時代の貝塚と平安時代の遺物などを調査することができました。

ここに成果を報告し、今後の長谷貝塚の保存措置を講ずる資料となれば幸いであります。

昭和63年 3月

兵庫県教育委員会

教育長 井 野 辰 男

例 言

1. 本書は兵庫県豊岡市長谷字ヨウガイ所在の長谷貝塚の昭和61年度一般県道香住大谷線道路改良工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は兵庫豊岡土木事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が実施したものである。調査は岡崎正雄が水嶋正稔（関西大学）と青木哲哉（立命館大学院）の補助を得て実施した。
3. 整理作業は岡崎と水嶋が行った。
4. 貝層サンプリング資料の水洗選別作業については調査員が行い、貝の分類については松田茂男（横浜国立大学）、藤重あけみ（甲南女子大学）、伊須原清子、神田智枝子の協力を得た。
5. 写真撮影は、遺構については岡崎・水嶋が行い、遺物については森 昭氏に依頼した。
6. 自然遺物については、動・植物遺体全般にわたって名古屋大学渡辺誠助教授に種々の教示を得た。
7. 木製品下駄の樹種鑑定については、木質古文化財調査会（代表島地謙京都大学名誉教授）に依頼し、玉稿を戴き付載とした。
8. 本書の執筆は、水嶋が第2章第1節・第4章第2・4節、青木が第2章第2節、その他は岡崎が担当し行った。
9. 編集は岡崎が行い、その責任がある。
10. 長谷貝塚、香住・荒原貝塚と中谷貝塚の資料について、豊岡市立郷土資料館蔵及び豊岡市教育委員会発掘調査資料の実見・実測の際、瀬戸谷睦・潮崎誠両氏から種々のご配慮を戴きました。
11. 但馬・丹後の縄文土器については、日高町神鍋在住の和田長治氏、日高町教育委員会加賀見省一氏に実見の機会と資料の提供を受け、参考とさせて戴きました。
12. 航空写真は国際航業株式会社提供の昭和42年撮影のものを使用しました。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 長谷貝塚の発見	1
第2節 長谷貝塚の調査	1
第2章 遺跡の環境	3
第1節 長谷貝塚周辺の歴史	3
第2節 長谷貝塚付近の古地理	9
第3章 遺跡の調査	13
第1節 調査の方法	13
第2節 土層	14
第4章 遺物	15
第1節 縄文時代の土器	15
第2節 平安時代以降の土器・土製品	19
第3節 縄文時代の石器	21
第4節 平安時代の木製品	22
第5節 自然遺物	22
第5章 まとめ	25
第1節 近畿北部の縄文時代後期初頭の遺跡について	25
第2節 中津式について	26
第3節 縄文人の生活	28
付載 長谷貝塚出土下駄の樹種	30

図版目次

- 図版 1 長谷貝塚空中写真（昭和42年撮影）
図版 2 長谷貝塚と発掘調査
図版 3 土層と貝層
図版 4 縄文土器
図版 5 1. 縄文土器
2. 平安時代以降の土器・土製品
図版 6 石器・木製品・種子類
図版 7 貝類・哺乳類・爬虫類・魚類
図版 8 豊岡市立郷土資料館蔵縄文土器
図版 9 下駄の樹種（スギ）顕微鏡写真

挿図目次

挿図 1	長谷貝塚の位置	1
挿図 2	長谷貝塚と香住・荒原貝塚	2
挿図 3	長谷貝塚周辺の遺跡分布図	4
挿図 4	地形分類図	9
挿図 5	地質断面図	10
挿図 6	古地理の復原図	12
挿図 7	発掘調査地区位置図	13
挿図 8	土層模式図	14
挿図 9	縄文土器	16
挿図10	縄文土器と土製品（豊岡市立郷土資料館蔵）	17
挿図11	平安時代以降の土器・土製品	19
挿図12	縄文時代の石器	21
挿図13	平安時代の下駄	22
挿図14	香住・荒原貝塚出土縄文土器（豊岡市立郷土資料館蔵）	25
挿図15	近畿地方北部の縄文時代中期末～後期初頭の主な遺跡分布図	26
挿図16	近畿地方北部における中津式土器文様概念図	27

表 目 次

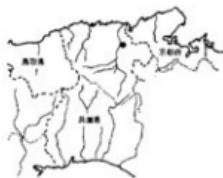
第1表 長谷貝塚周辺遺跡一覧表.....	7・8
第2表 出土遺物一覧表.....	15
第3表 貝類一覧表.....	23
第4表 サルボウ計測表.....	23
第5表 植物遺体一覧表.....	24

第1章 調査の経緯

第1節 長谷貝塚の発見

但馬の縄文遺跡の中で、豊岡市中谷貝塚（旧城崎郡新田村）¹⁾が大正2年に堀内清氏の発見から京都帝国大学今西龍氏や東京帝国大学大野雲外氏、そして直良信夫氏の調査を経て、しばらく但馬唯一の貝塚として著名であった。昭和16年には立命館大学藤岡謙二郎氏等が発掘調査を実施し、「但馬豊岡盆地と中谷貝塚」²⁾として報告をまとめられた。貝塚の調査としては総合的なものであった。

その後、少し時間的空白があったが、昭和30年代に入ると豊岡盆地周辺の調査がされる。昭和33年、豊岡市南東部（旧出石郡神美村域）穴見川と立石川が合流する通称ぶろ山の北東斜面地のポンプ小屋建設時に、当時豊岡高校教諭山本茂信氏の調査で貝層と土器を発見し、香住・荒原貝塚³⁾が発見された。翌昭和34年、長谷字ヨウガイの地区防火水槽の掘削時にヤマトシジミを主とする貝層と土器とイノシシの骨・牙を発見し、長谷貝塚が知られた。香住・荒原貝塚と長谷貝塚とも縄文時代後期の遺跡である。工事中の発見であったため、正確な貝層や遺物出土状況については不明な点が多いが、前記の中谷貝塚とともに引用されることが多く、遺跡として周知されるに至っていた（挿図2）。



挿図1 長谷貝塚の位置

註 1) 堀内清『但馬の新貝塚』『歴史地理』23卷1号 1914年

2) 直良信夫「但馬城崎郡新田村中谷貝塚の貝類」『史前学雑誌』3卷4号 1931年

直良信夫『近畿古代文化叢考』1943年

3) 岩根保重、藤岡謙二郎「但馬豊岡盆地と中谷貝塚」『史前学雑誌』13卷5号 1941年

4) 以後、昭和23年岡山大学、昭和26年山根武氏と豊岡高校による試掘調査が行われた。

5) 石野博信『縄文時代の兵庫』 1979年

6) 「豊岡市史」上巻 1981年には香住・荒原遺跡や長谷遺跡が貝塚ではないとの見方が有力であるとされていた。本文では、香住・荒原遺跡は荒原人形出土地と区別するために香住・荒原貝塚とし、長谷遺跡は今回の調査で貝層を確認したため長谷貝塚の名称を使用する。



插図2 長谷貝塚と香住・荒原貝塚

第2節 長谷貝塚の調査

長谷貝塚については、防火水槽下に貝層が存在することは周知されていたが、その範囲等については不明であった。ところで、兵庫県教育委員会は、県事業について、事業計画を施行前年までに把握するように努め、開発担当部局と、当該の市町教育委員会に「埋蔵文化財に関する調査票」の回答を求めていた。長谷貝塚については、昭和61年4月までの回答で、豊岡土木事務所・豊岡市教育委員会から一般県道香住大谷線道路改良工事に遺跡の範囲が入るようなので、事業計画にあたっては、文化財保存の手続を取るよう協議していた。

昭和62年2月に入って、豊岡市教育委員会からの連絡により、長谷地区の道路改良工事が既に着手されており、一部現状が変更されていることが判った。2月23日、県教育委員会と豊岡土木事務所とが現地立会いし、文化財保存について協議を行った。長谷貝塚周辺の工事計画と現状は、現道を片側、幅1~2m、長さ184mの拡幅であり、防火水槽のある東側について工事がほぼ完了しており、西側工事はこれからであった。協議の結果、東側については、貝層を含めた遺物包含層や遺構への工事の影響・損傷度について確認を行うため、隣接地に2×2mのグリッド(坪)を2箇所設け調査を行い、西側は未着手のため重機(バックホウ)を使用して立会い調査を行うこととなった。

第2章 遺跡の環境

第1節 長谷貝塚周辺の歴史 —旧神美村域を中心として—

遺跡は、兵庫県豊岡市長谷字ヨウガイに所在する。長谷地区は、旧出石郡神美村に属し、現在は豊岡市の南東部に位置する。以下、周辺の遺跡について、旧神美村域を中心として時代を追って説明を加える（挿図3）。

まず、この地域における縄文時代の遺跡として3箇所の貝塚が挙げられる。中でも著名なものは旧城崎郡新田村の中谷貝塚（3）である。当貝塚は縄文時代中期の中頃に貝塚の形成を始め、晩期に至るまで断続的に行われている。香住・荒原貝塚（2）は昭和33年、ポンプ小屋建設の際に土器・貝類などが出土したもので、長谷貝塚（1）とは指呼の距離にあり、時期も同じく後期初頭からと考えられる。長谷貝塚を含めて以上3箇所の遺跡が、いずれも貝塚を形成しており、比較的まとまった範囲の中に集中していることは、但馬の縄文時代を考える上で看過できない。

続く弥生時代前期の土器を出土する遺跡として、駄坂川原遺跡（16）と宮内・黒田遺跡（7）がある。前者は、前期中葉から中期前半に至る土器を出土し、同時に貝類・獸骨も発見されたことから貝塚の可能性も指摘されるが、川床ゆえ不明な点も多い。後者は、出石神社の南西60mにあり、出石神社を中心とする微高地の末端に位置する。遺構は確認されなかつたが、前期中葉から中期にかけての土器の存在は、後述する宮内遺跡（8）の先駆をなすものであることを示唆している。

中期の遺跡として考えられるのは、前期から続く先述の2遺跡と、後期へと続く宮内遺跡である。しかし、後期以降に比してやや希薄な感がある。今後の資料の増加が待たれる。

後期になると、一転して多くの遺跡が知られる。中でも近年、弥生時代後期、あるいは後期から古墳時代初頭にかけての墳墓が相次いで調査され、その様相が明らかになってきている。旧神美村域の北部においては、立石墳墓群（14）、立石・山崎4号地点（15）、東山墳墓群（13）などがそれにあたる。いずれも地山整形の低墳丘上に多数の埋葬施設を有するものである。宮内地区には御屋敷遺跡（34）がある。御屋敷遺跡の墳墓は先の3例と同じく、いわゆる多葬墓で同じ墓域内に古墳時代前期の小堅穴式石室2基を有している。特筆すべきは、大型で特異な墓壙をもつ1号墓で、木椁墓と考えられている。旧神美村域ではないが、盆地東南部には入佐

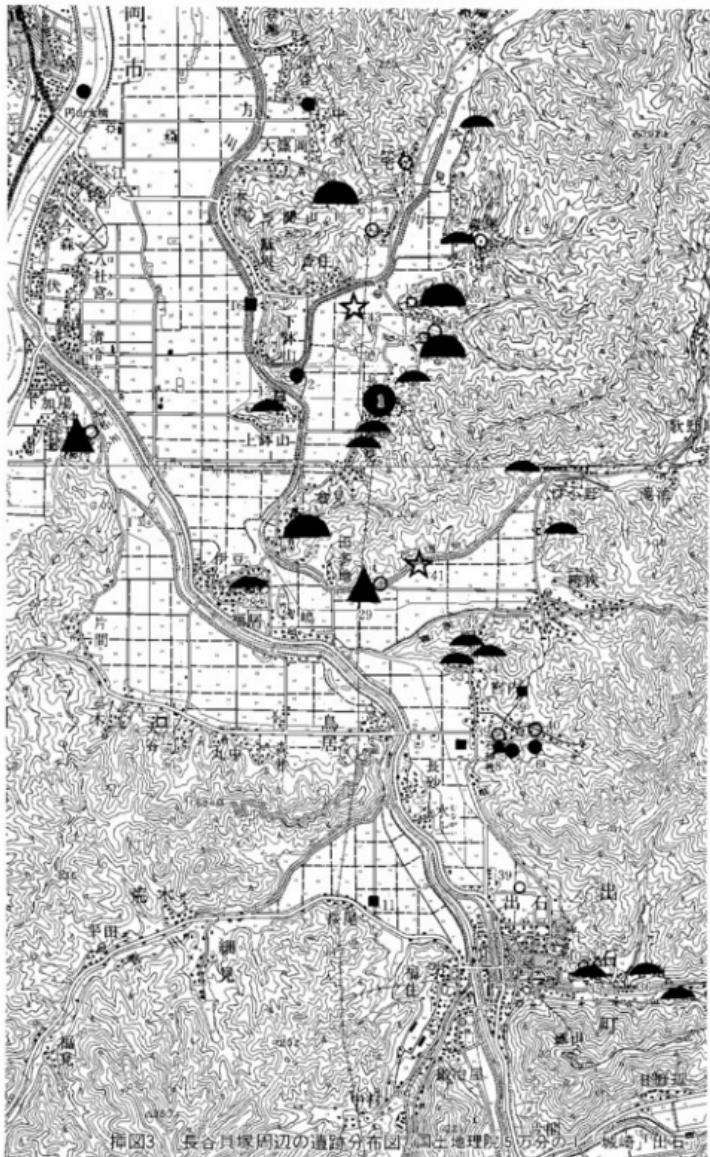


図3 長田島周辺の道路分布図 (国土地理院5万分の1地図)

山墳墓群（10）がある。前方後円墳の入佐山1号墳（35）の存在する山頂から派生する尾根上に点々と築かれている。これらのうち、山崎4号地点、東山墳墓群、入佐山墳墓群などでは棺側に土器を破碎して置く例がみられ、共通した何らかの葬送儀礼や風習を想起させられる。

こうした墳墓の後を受け、古墳時代になると多くの古墳が当該地域においても築かれるようになる。以下、古墳時代を概ね前期・中期・後期に分けて概説していく。

前期の古墳としては、森尾市尾古墳（20）、御屋敷遺跡の2基の小竪穴式石室、半坂峠古墳群（19）が挙げられる。前二者は、共に小竪穴式石室を埋葬施設としてもつもので、一定の墓域に複数の埋葬を行なう点で共通する。しかし、周知の通り森尾市尾古墳は「正始元年」銘鏡を出土するなど、他に卓越した首長墓の感を抱かせるという事実は否めない。半坂峠古墳群南尾根1号墳は4基の土器棺墓のみから構成されるものである。他の土器棺を有する古墳が、複数の木棺墓や石棺墓を伴っていることを考えるとやや特異といえる。

旧神美村域の古墳のうちの多くは次の中期に属するものと考えられる。カチヤ古墳（19）のように古墳群内ではやや突出した感じにみえるものもあるが、ほとんどは、北浦古墳群（21）、立石古墳群（22）、長谷・ホウジ古墳群（23）、長谷・ハナ古墳群（24）、田多地古墳群（27）のように、尾根上の何基かで構成しているようである。一方、盆地東南部の入佐山1号墳、茶臼山古墳（36）は共に大型の古墳で埴輪を有するなど、旧神美村域の古墳とは様相を異にしている。長谷地区に所在する2つの古墳群のうち、ハナ古墳群は、長谷貝塚を眼下に見下ろす位置にあるが、貝塚の上層からは同時期の遺物は出でていない。また、ホウジ古墳群1号墳からは鍛冶工具一式が出土しており、被葬者像を考える上で興味深い。

後期になると、埋葬施設として、横穴式石室が採用されるようになる。調査されたものに、三宅・オヤシキ古墳群1号墳（18）、篠谷古墳群2号墳（30）がある。しかし、当地域の特色として横穴墓の存在が顕著といえる。それらは北浦、立石、長谷、倉見（25）、上鉢山（26）、下坂（32）、坪井（33）の各地区に存在、または存在したとされている。一帯が花崗岩の風化土地帯によるものもあるが、分布する北但馬でも特に集中した地域といえよう。時期については、古墳時代後期のものと、それよりやや後に築造開始するものがあることが指摘されている。

奈良時代の遺跡としては、三宅に所在する薬琳寺遺跡（47）と三宅小学校裏山藏骨器出土地（45）がある。薬琳寺遺跡からは瓦片が出土しており、寺跡と考えられるが、「ミヤケ」という大字からも類推されるような施設の存在も考慮される。平安時代の遺跡としては、墓、経塚、祭祀遺物出土地がある。まず平安時代の墓と考えられるのは、立石103号地点（44）である。土壙墓であるが、壙内に富寿神宝2枚と須恵器2点が納められていた。時期的にはやや下るかも知れないが、経塚が2箇所で発見されている。1箇所は、入佐山1号墳墳丘上に築かれた入佐山経塚（38）。もう1箇所は、田多地古墳群の古墳の墳丘上に3基築かれた田多地経塚（42）

である。構造としては横口式石室であり、類例の少ないものである。祭祀遺物を出土する遺跡には荒原・人形等出土地(43)と砂入遺跡(41)²⁾がある。荒原からは圓場整備工事中に人形・馬形・斎串が出土している。最近、見つかった砂入遺跡からは多量の人形・斎串などの木製品が出土している。旧神美村域では、郡衙など官衙と積極的に評価される遺跡が知られておらず、これらの祭祀遺物の存在は、官衙などの遺跡の所在を知る手がかりになり得ると考えられ、今後の調査に期するものである。

註 1) 漢戸谷晴はか「但馬の横穴墓」「日撫・正福寺谷横穴墓群」豊岡市教育委員会 1987年

2) 現在、兵庫県教育委員会が調査中。西口圭介氏の御教示による。

文 献

- ① 石野博信『縄文時代の兵庫』兵庫考古研究会 1979年
- ② 「豊岡発掘だより」第10号 豊岡市教育委員会・豊岡市立郷土資料館 1987年
- ③ 漢戸谷晴・渡辺誠「円山川採集の縄文土器—近畿縄文時代の遺跡と遺物(6)—」『古代文化』第30巻第12号古代学協会 1978年
- ④ 池田正男ほか「考古編」「出石町史」第3巻(資料欄1) 出石町 1987年
- ⑤ 西谷英昭・前田豊邦「出石町宮内遺跡調査概報」「兵庫県埋蔵文化財調査集報」第4集 1979年
- ⑥ 池田正男・森内秀造「出石・宮内遺跡—宮内字三井町の坪・寺鏡—」出石町教育委員会 1984年
- ⑦ 渡辺昇「出石郡出石町西の谷遺跡出土器台」「兵庫考古」第7号 1979年
- ⑧ 「豊岡発掘だより」第17号 豊岡市教育委員会・豊岡市立郷土資料館 1987年
- ⑨ 漢戸谷晴・潮崎誠「北浦古墳群・立石墳墓群」豊岡市教育委員会 1987年
- ⑩ 漢戸谷晴・宮村良雄「豊岡市立石・山崎古墳群発掘調査概要」「豊岡市文化財調査概報集(1985)」豊岡市教育委員会 1986年
- ⑪ 潮崎誠・谷本道はか「但馬の弥生式土器(1)」「但馬考古学」第1集 但馬考古学研究会 1982年
- ⑫ 岡田章一「豊岡市加陽遺跡」『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』兵庫県教育委員会 1982年
- ⑬ 山本三郎・渡辺昇ほか「半坂峠古墳群・辻遺跡」兵庫県教育委員会 1983年
- ⑭ 漢戸谷晴はか「北浦古墳群」豊岡市教育委員会 1980年
- ⑮ 宮村良雄・漢戸谷晴・松井敬代「長谷・ホウジ古墳群 妙楽寺・見手山横穴墓群」豊岡市教育委員会 1986年
- ⑯ 漢戸谷晴「長谷・ハナ古墳群」但馬考古学研究会 1984年
- ⑰ 岡本久彦「下安良城山古墳調査概況」「兵庫県埋蔵文化財調査集報」第2集 1974年
- ⑱ 小川良太・森内秀造「田多地古墳群・田多地経塚群」出石町教育委員会 1985年
- ⑲ 森内秀造ほか「田多地小谷遺跡」兵庫県教育委員会 1983年
- ⑳ 「篠谷2号墳現地説明会資料」出石町教育委員会 1987年

- ⑪ 岡本久彦「出石町下坂の地下式土塚墓」『但馬史研究』4 1973年
- ⑫ 前田豊邦「御屋敷跡発掘調査概要」『考古学ジャーナル』259号 1986年
- ⑬ 武庫川女子大学考古学研究会『但馬の古墳 茶臼山・萬塚古墳測量報告』 1973年
- ⑭ 但馬文教府『原始古代の但馬』 1979年

第1表 長谷貝塚周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	時期	遺跡の種類	概要	文献
1	長谷貝塚	豊岡市長谷	縄文(後期)	貝塚	土器・石器・貝類・獸骨・魚骨出土。	①
2	香住・荒原貝塚	豊岡市香住	縄文(後期)	貝塚	土器・貝類・獸骨出土。	①
3	中谷貝塚	豊岡市中谷	縄文(中期～晩期)	貝塚	土器・石器・貝類・獸骨・魚骨出土。	②
4	円山川用床遺跡	豊岡市大磯	縄文(後期)		土器出土。	③
5	宮内・三井町の坪	出石町宮内	縄文(後期)		土器採集。	④
6	宮内・岡田	出石町宮内	縄文(早期)？		異形局部磨製石器採集。	④
7	宮内・黒田遺跡	出石町宮内	弥生(前期～中期)		土器出土。	⑤
8	宮内遺跡	出石町宮内	弥生(前期)～平安	集落	土器・木製品出土。奈良～平安時代の掘立柱建物3棟。	⑥
9	上坂遺跡	出石町宮内	弥生(後期)		土器・石器出土。	④
10	入佐山墳墓群	出石町下谷	弥生(後期)	墓	弥生～古墳時代の墳墓6基。総数500個のガラス小玉出土。	④
11	モロミ台遺跡	出石町弘原	弥生(後期)		土器・木製品出土。	④
12	西の谷遺跡	出石町大谷	弥生(後期)		土器出土。	④⑦
13	東山墳墓群	豊岡市上鉢山	弥生(後期)	墓	総数30基以上。(調査終了中)	⑧
14	立石墳墓群	豊岡市立石	弥生(後期)	墓	総数60基。	⑨
15	立石・山崎4号地点	豊岡市立石	弥生(後期)	墓	古墳時代中期の古墳群と同じ尾根に位置する。	⑩
16	駄坂川原遺跡	豊岡市駄坂	弥生(前期～中期)	貝塚？	土器・石器・貝類・獸骨出土。	⑪
17	加賀遺跡	豊岡市加賀	弥生(中期)～平安	集落	土器・碧玉未製品出土。	⑫
18	オヤシキ古墳群	豊岡市三宅	古墳(後期)	墓	横穴式石室墳の群集墳。1号墳を測量調査。	⑬
19	半板崎古墳群 カチヤ古墳	豊岡市三宅	古墳(前期～中期)	墓	一墳丘に4基の土器棺墓。組合せ式石棺。	⑬
20	森尾市尾古墳	豊岡市森尾	古墳(前期)	墓	「正始元年」銘鏡出土。小壁穴式石室3基。	⑭
21	北浦古墳群	豊岡市森尾	古墳(中期～後期)	墓	古墳時代中期～後期の群集墳。	⑯
22	立石古墳群	豊岡市立石	古墳(中期～後期)	墓	古墳時代中期～後期の群集墳。	⑯
23	長谷・ホウジ古墳群	豊岡市長谷	古墳(中期)	墓	2基調査。鍛冶工具一式出土。	⑯
24	長谷・ハナ古墳群	豊岡市長谷	古墳(中期)	墓	8基で群を構成。一墳丘多群。	⑯
25	倉見横穴墓群	豊岡市倉見	古墳(後期)	墓	4基現存。	
26	田和地横穴墓群	豊岡市上鉢山	古墳(後期)	墓	多数現存。	⑯

No	遺跡名	所在地	時期	遺跡の種類	概要	文献
27	田多地古墳群 下安良城山古墳	出石町田多地 出石町安良	古墳(中期)	墓	一壇丘多葬。一壇丘石棺3基。石枕出土。	⑫ ⑬
28	箱根山口号墳	出石町福居	古墳(中期)	墓	変形四獸鏡出土。	④
29	田多地小谷遺跡	出石町田多地 平安	古墳(前期)～ 集落		古墳時代前期の土器多量出土。井戸。	⑯
30	篠谷古墳群	出石町口小野	古墳(後期)	墓	横穴式石室墳の群集墳。2号墳を調査。	⑭
31	小野小学校裏山遺跡	出石町口小野	弥生(後期)～ 古墳(中期)		弥生式土器・須恵器。滑石製勾玉出土。	④
32	下坂横穴墓群	出石町宮内	古墳(後期)	墓	地下式横穴墓3基。鎌倉時代の青磁碗出土。	④⑪
33	坪井横穴墓群	出石町宮内	古墳(後期)	墓	消滅	④
34	御屋敷遺跡	出石町宮内	弥生(後期)～ 鎌倉	墓	弥生～古墳時代の墳墓。横穴墓・V字溝・火葬墓。	⑩
35	入佐山1号墳	出石町下谷	古墳(中期)	墓	前方後円墳。家形埴輪出土。	④
36	茶臼山古墳	出石町谷山	古墳(中期)	墓	三段基成で周濠をもつ円墳。円筒埴輪出土。	④⑬
37	鷄塚古墳	出石町谷山	古墳(後期)	墓	横穴式石室墳。	④⑬
38	入佐山経塚	出石町下谷	平安(後期)～ 鎌倉	経塚	銅製経筒1個と鉄製経筒10個以上。	④
39	堂乱・軒丸瓦出土地	出石町分	平安		五葉素弁蓮花文軒丸瓦出土。	④
40	宮内・富寿神宝出土地	出石町宮内	平安		土師質の壺に約200枚納める。	④
41	砂入遺跡	出石町田多地	平安	祭祀	多筆の人形・壹串・馬形・舟形出土。(現存、調査中)	⑪
42	田多地経塚	出石町田多地	平安(後期)	経塚	3基。横口式石室を設ける。	⑪
43	荒原・人形等出土地	豊岡市香住	平安	祭祀	人形・馬形・壹串出土。	⑨
44	立石103号地	豊岡市立石	平安	墓	土塗墓。須恵器2点と富寿神宝2枚副葬。	⑨
45	三宅小学校裏山藏骨器出土地	豊岡市三宅	奈良	墓	藏骨用の須恵器出土。	
46	森尾・土馬出土地	豊岡市森尾	奈良	祭祀	鹿馬。	
47	薬勝寺遺跡	豊岡市三宅	奈良(前期)	寺院? 官衙?	軒丸瓦・鶴尾片出土。	

第2節 長谷貝塚付近の古地理

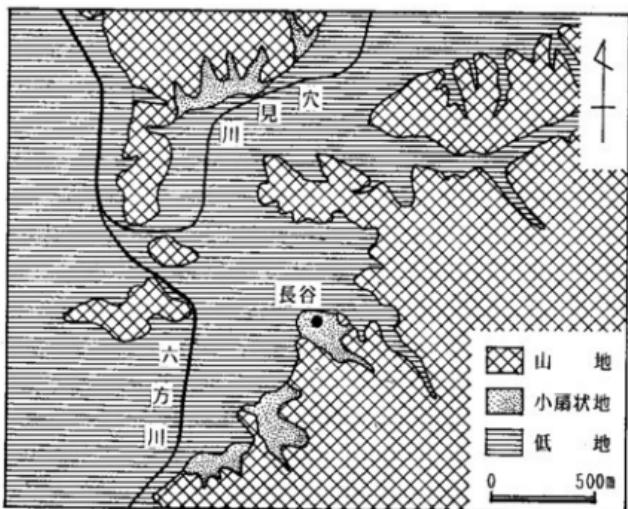
青木哲哉(立命館大・院)

貝塚の形成にあたっては、自然環境が大きく関わっていると考えられる。したがって、貝塚の立地を明らかにするには、当時の海岸線の位置や貝塚がつくられた地点における地形環境などに関して考察する必要がある。

そこで、本稿では発掘調査で得られたデータから考察できうる長谷貝塚付近の古地理について明らかにしてみたい。

1. 地形の分布

長谷貝塚は、円山川の支流である穴見川がつくった谷中に位置している。この谷は、豊岡盆地の西端部に形成されており、東北から西南に向って細長くのびる。谷の周辺には花崗岩から

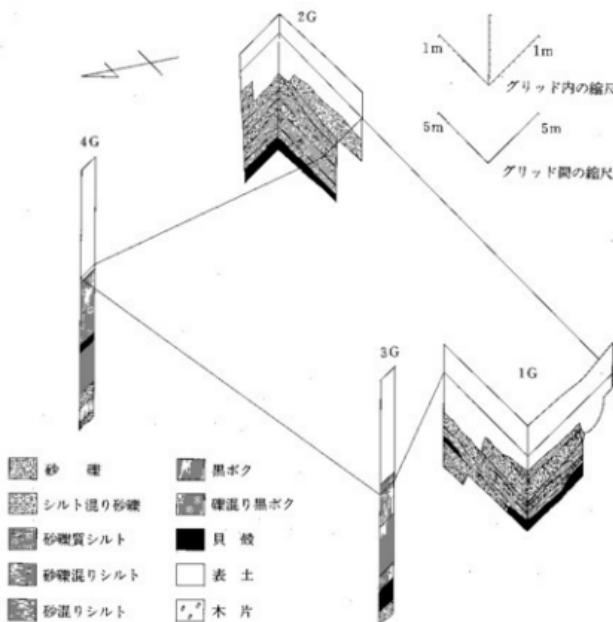


挿図4 地形分類図(●は長谷貝塚)

なる山地が認められ、山麓付近には小規模な扇状地が点々とみられる。これらの小扇状地は、山地に刻まれた小谷の中から穴見川流域の低地に向って発達している場合が多く、低地とは傾斜変換線で境されている。長谷貝塚付近の小扇状地は、西北方向へおよそ22.9%の傾斜で高度を減じており、長谷貝塚はこの小扇状地の扇端付近に立地している。

2. 堆積物の特徴

長谷貝塚付近の堆積物は、東南部と扇端に近い西北部とで異なっている。東南部のグリッド(1G, 2G)で観察される堆積物は、基本的には下位より淡灰褐色の砂礫層、貝層、暗灰色ないし暗褐色を呈する砂礫混りシルト層とシルト混り砂礫層との互層および盛土に分けられる。最下位にみられる淡灰褐色の砂礫層は、主に径1cm以下の礫および粗砂によって構成されている。これらの堆積物は、花崗岩が風化してつくられたマサからなり、小扇状地の背後にひろがる山地から供給されたと考えられる。この上位には、縄文時代後期の土器を包含する貝層



掲図5 地質断面図

が分布している。同層と下位の砂礫層との間には、1 G のように場所によっては暗灰色のシルト質礫層が挟在することがある。貝層を複数する暗灰色のシルト混り砂礫層ないし暗褐色の砂礫混りシルト層は木片を混入することがあり、これらの層からは平安時代の遺物が検出される。これより上位には、暗灰色の砂礫混りシルト層とシルト混り礫層が 3 ~ 5 層にわたって互層をなして堆積している。これらの各層には、グラニウル大の礫が多く含まれ、層理は認められない。

これに対して、西南部のグリッド（3 G、4 G）における層序は、下位より淡灰褐色の砂礫層、貝層、黒ボクおよび盛土である。これらの各層のうち、淡灰褐色の砂礫層はマサからなる径 1 cm 以下の礫と粗砂からなり、東南部のグリッドにおいて認められた砂礫層に連続すると考えられる。また、貝層の上位の黒ボクは、他の層に比べて層厚が大きく、西北部のグリッドのみに認められる。この黒ボクはさらに上下 2 層に細分でき、下位の黒ボクからは平安時代の遺物が検出されている。このことと黒ボクの下位に縄文時代の貝層が認められることを考え合わせると、下位の黒ボクは縄文時代後期以降に堆積時期の上限が求められ、それ以後平安時代頃までに生成、堆積したものと推定される。他方、上位の黒ボクは、グラニウル大の礫が混入している点で下位のそれと異なる。この黒ボクは、下位の黒ボクの堆積時期から判断して、平安時代以降に堆積したと思われる。なお、4 G において上位と下位の黒ボクの境界部に、貝層がレンズ状に挟在しているところがある。この貝層は、他のグリッドにみられる貝層と違って、貝殻の密度が小さく、かつ貝殻と貝殻の間を黒ボクが充填している。これらの点から、この貝層は貝塚が形成された後 2 次的に堆積したと推定される。

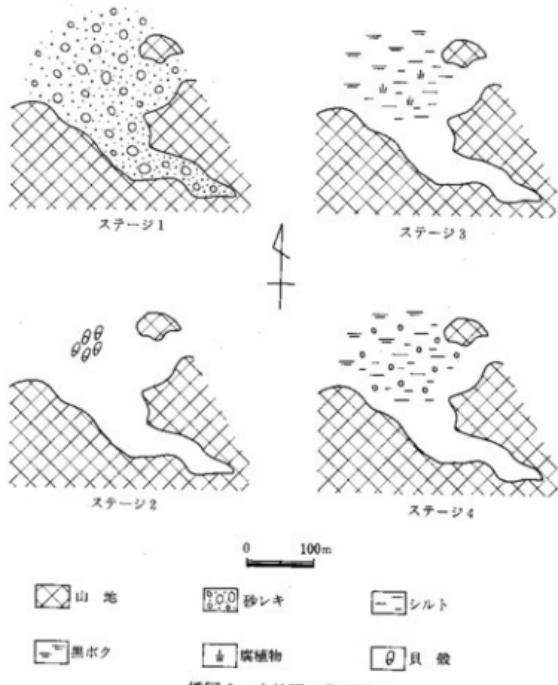
3. 古地理の変遷

ここでは、これまで述べてきた事柄をもとに、長谷貝塚付近の古地理について考察してみることにする。

縄文時代後期以前、長谷付近の山地には小谷が刻まれ、そこに花崗岩によって構成された後背の山地から砂礫が供給された。その結果、小谷から穴見川流域の低地に向って小規模な扇状地が発達した（ステージ 1）。その後、扇状地の発達は休止し、縄文時代後期に入るとこの上に貝塚がつくられた（ステージ 2）。現在、豊岡盆地は陸化しており、海岸線は盆地のおよそ 16 km 北方に位置している。しかし、長谷付近に縄文時代後期の貝塚が存在していたことからみて、当時海は城崎付近の狭く部をへて豊岡盆地に入り込み、海岸線は長谷からあまり遠くないところにまで前進していたものと考えられる。

平安時代頃は、貝塚の東南部でシルト混り砂礫および砂礫混りシルトが、西北部において黒ボクが生成、堆積するような比較的静穏な環境であった。これらの細粒堆積物によって、貝塚は埋積されるに至った（ステージ 3）。その後、貝塚の西北部では砂礫混りシルトとシルト混

り砂礫とが繰り返し堆積し、一方、東南部においては疊の混入した黒ボクが生成された（ステージ4）。以上のように、長谷貝塚は縄文時代後期までに形成された小扇状地上につくられ、それ以降の比較的静穏な環境の下で埋積されていったと考えられるのである。



挿図6 古地理の復原図

第3章 遺跡の調査

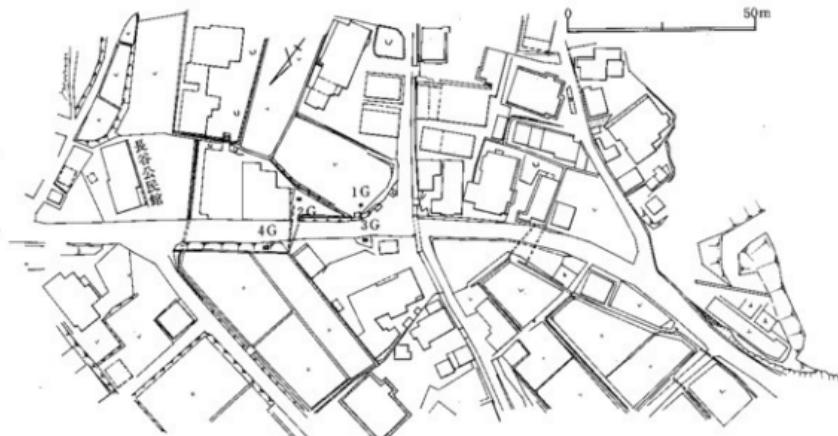
第1節 調査の方法

長谷貝塚について昭和62年2月23日の豊岡土木事務所との協議の結果、不幸にも工事が施行されてしまった東側については、遺跡への損傷度を調べるために、豊岡土木事務所の責任において、長谷区と隣接地土地所有者の承諾を得て、確認調査を実施することになった。

3月9日から11日までの3日間で、調査を実施することとなり、9日午後、土地所有者美藤正勝氏・村尾栄治氏の協力を得て、道路工事用地際に、 $2 \times 2\text{m}$ のグリッド(G)を計画した。実際は、1G ($2 \times 1.8\text{m}$)、2G ($1.8 \times 1.5\text{m}$)となり、雪水で調査が難渋し、深いため階段掘りを行った。

1G で表土下 1.6m でヤマトシジミを主とする貝層ブロックを調査し、2G は同じく階段掘りで 2m の深さまで掘り、貝層を調査した。

1、2Gとも10日ではば調査を終え、1G、2Gで調査した貝層を取り上げ、11日は天候が悪く、排水を行い、2Gについて簡易な各土層のブロックサンプリングを行った。天候の悪化と湧水のため、充分な調査とならなかったが、地元の人々へ現地での説明を行った後埋め戻しを行い、今後の保存への調査を待つこととした。



挿図7 発掘調査区位置図

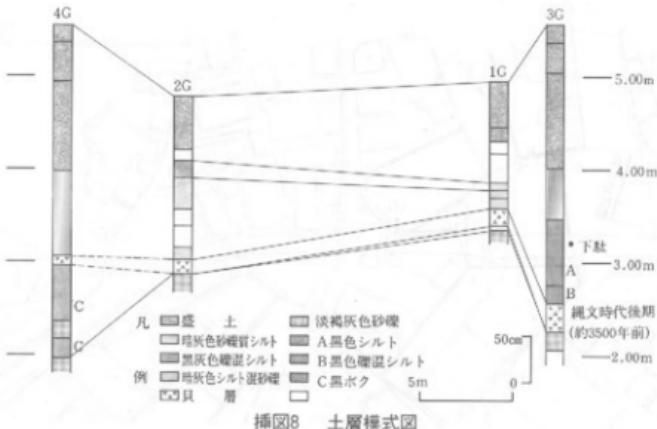
西側については、拡幅部が1～2mと狭く、交通量のある道路の横という条件で、危険なため、重機（バックホウ）による2箇所の掘削を行い、断面の観察することとした。掘削部を3・4Gとし、3Gは地表下3.5m、4Gは3.6mまで削り下げ、それぞれ貝層の確認と下層の砂礫層を確認した。また、盛土が厚く危険なため、充分な調査観察ができなかつたが、埋め戻しを行ひ調査を終了した。

註 1) 調査に際しては、豊岡土木事務所工務第1課岡田義信課長補佐、田村博之主任、安見文宏技術吏員から測量などの種々の協力を得た。

第2節 土層

挿図8、土層柱状図をみると、基本的には耕土（盛土）、暗灰色シルト（黒色シルト）、貝層、砂礫となる。耕土は電柱の基礎などで一部擾乱されていたが、近世の遊びや祭祀と関連する狐の土人形が出土した。暗灰色シルトから平安時代を中心とする須恵器・土師器・黒色土器・白磁や木製品下駄が出土し、一部須恵器片などが、貝層の上部にくいこんでいる。貝層からは1・2Gでは縄文時代後期の中津式土器群と石器が出土している。貝層は1Gでは深さ1.3m、2Gでは深さ1.9mで検出される。昭和34年の防火水槽建設時に、上の道路面から2m下に貝が出たという話と符合するものである。

地形の傾斜は貝層から砂、砂礫面で測ると、1・2G間は北東へ10度、1Gから2Gへ緩く傾く。



第4章 遺物

各調査区において第2表のとおり、土器（縄文土器・須恵器・土師器・黒色土器・白磁）、土製品（泥人形）、石器（磨製石斧・石錘・敲石・石鎚・石器製作時の石屑）、木製品（下駄）そして自然遺物（貝類・哺乳類・爬虫類の骨と歯・魚類・種子類）が出土した。時期は縄文時代後期の貝層を中心に、上層の黒色シルト層から平安時代・耕作土から江戸時代の遺物がある。

つぎに、1. 縄文時代の土器、2. 平安時代以降の土器・土製品、3. 石器、4. 木製品、5. 自然遺物に分けて述べることにする。

第2表 出土遺物一覧表

地区名	土 器				土製品	石 器	木製品	自然 遺 物			
	縄文土器	須恵器	土師器	黒色土器	白磁			貝類	哺乳類・爬虫類	魚類	種子
1 G	30	9	22			1	○	○	○		
2 G	64	9	30	6			○	○	○	○	○
3 G	13	3	6		2		○	1	○	○	○
4 G		2	1					○			
合計	107	23	59	6	2	1	○	1	○	○	○

(数字は出土点数 ○は出土、◎は多く出土)

第1節 縄文時代の土器 (図版4・5、挿図9)

縄文土器は107点出土しているが、細片が多く、できるだけ図化を行った30点について述べる。有文土器14点、無文土器10点、底6点である。器種は深鉢である。

1. 有文土器

a類 沈線にて文様を描き縄文を施さないもの (①・⑨・⑪)、b類 太い沈線にて文様を描き、沈線間を帶状に縄文を施すもの (②・⑧・⑩・⑫)、c類 縄文を施すもの (⑬)、d類 頸胴部に細い縄文を帶状に施すもの (⑭) がある。

a類 ①はサルボウの貝腹縁の条痕を地文とし、外面はナデ消すが、太い沈線 (幅4mm) により、口縁と平行して4cm間隔で2条の線を描き、山形口縁の頂部下に1条の沈線で漫文の崩れたかのような文様を割りつける。山形口縁頂部裏は少し凹む。⑨は、同じく横位の条痕地に2本の沈線で文様を描く。⑪は地文はナデで不明であるが、太い沈線で文様を施されている細片である。



插図9 繩文土器

b類 太い沈線間を縄文R₁¹にて充填するもので、やや内弯する口縁部で、内面は石などで磨かれたもの②～④と、中期末北白川C式4期などの文様構成が崩れたもので橋状部片⑤や口縁部が垂下する⑥がある。⑦は太い沈線と竹管の刺突で文様を描き、⑧は太い沈線で同心円の中心飾りと左右の文様を描き、沈線間を縄文R₁¹で充填する。山形口縁、突起状の退化で口縁が文様のみ残すものである。

c類 ⑨は細い細文L₁¹を施す小片で、文様は不明である。

d類 ⑩は3G出土のもので、縄文R₁¹の細いものを施文するもので、後期後半の元住山式にまで降るものである。

2. 無文土器

a類 外面に条痕のないもので、口縁部片である(⑪・⑫・⑬・⑭)。

b類 細い植物質条痕のある深鉢で⑮は口縁部で、⑯は胴部である。

c類 サルボウなど二枚貝の条痕のある深鉢の胴部破片で、両面に顯著な条痕をのこすもの⑰・⑱と、内面を磨ぐ⑲・⑳がある。

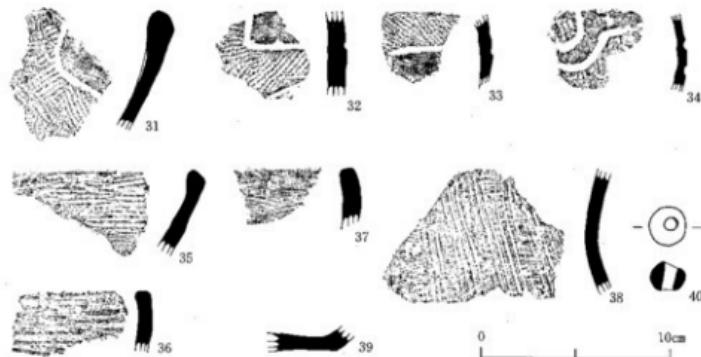
3. 底部

a類 条痕地の深鉢形土器の底部とおもわれる⑳・㉑・㉒・㉓がある。

b類 有文土器か無文土器の底部と考えられる㉔・㉕がある。

a・b類とも平底である。

ここで、昭和34年遺跡発見時の資料で豊岡市立郷土資料館収蔵のものを紹介する。(図版8、挿図10) 1. 有文土器4点、2. 無文土器4点、3. 底部1点、4. 土製品・土玉1点の10点の資料である。



挿図10 縄文土器と土製品（豊岡市立郷土資料館蔵）

1. 有文土器

⑩は山形口縁部位で2本の太い沈線(幅4mm)で頂部から描き、縄文R^{1/2}で充填する。原体長は約2cm、2cm幅で回転させ、方向を変え充填する。下方にJ字文を描くと考える。⑪・⑫は胴部片で太い沈線で文様を描き、縄文L^{1/2}とR^{1/2}でそれぞれ充填する。⑬はJ字文を描いている。

2. 無文土器

サルボウなど貝腹縁の条痕のある口縁部で、施文は横方向である(⑭・⑮)。⑯は胴部は横方向の条痕のち縱位方向の条痕を施す。

⑰は、異原体の浅い条痕を残す口縁部片である。

3. 底部

底は使用時の摩耗が観察され、内外とも良く磨かれている(⑲)。

4. 土製品・土玉

土玉⑳と考えられるもので、直径2cm、厚み1.6cmの大きさで円孔は直径6mmで、棒状のものに粘土を巻きつけて玉状につくったものである。

今回の調査資料と豊岡市立郷土資料館蔵資料を合せて検討し、有文土器と無文土器について述べる。

有文土器 幅3~4mmの太い沈線にて二条の平行線を描く。沈線の間隔は1.6~10mmと狭いものと、2.15~25mmと3.40mmの3類型に分かれる。また、充填する縄文はR^{1/2}:L^{1/2}=10:2となりR^{1/2}を主に用いる。沈線のみで文様を描き、縄文を充填しないものがある。文様は、中津Ⅱ式の山形口縁部に2条沈線で頂部から垂下し、J字文を大きく描くもので、平口縁部では帯状となるものが多くを占め、沈線間隔も2類型であり、3類型について幅広となっているが、古い文様の描き方で中間に1条沈線で渦文を描いており、それを加えると15~25mmとなり2類型となる。内面に条痕を残すことは他と異なる。また、古い文様の描き方をする⑤・⑥を除くと中津Ⅱ式に属するものと考える。

無文土器 サルボウなどの貝腹縁による条痕文土器を主に、植物質の条痕や条痕を消した無文土器が従にある。貝条痕が占める割合が増えるのも中津式の特徴である。

註 1) 豊岡市立郷土資料館瀬戸谷暁氏に館蔵資料の実見の機会を与えて戴き、図化することの許可を得た。種々の協力に感謝するものであります。

2) 第5章まとめに中津Ⅱ式について若干の観点を述べてある。

第2節 平安時代以降の土器・土製品

平安時代以降の遺物として、須恵器・黒色土器・土師器・白磁の各種土器と土製品がある。土器は完存するものではなく、細片が多い。遺構は検出されなかったが、各層ごとに遺物を取り上げた結果、特に貝層直上の黒色シルト層より平安時代の土器が出土した。以下、各々種類に分けて述べる（図版5、挿図11）。

1. 須恵器（①～③）

各グリッドから出土しているが、図示し得たのは2Gの3個体である。黒色シルト層、及び貝層の上面に食い込んだ状態で出土した。器種は、すべて椀と考えられる。椀は、それぞれ底部の形態によって分けられる。

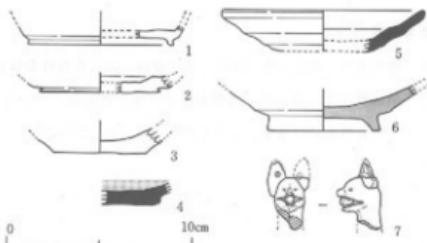
①は、底部をヘラ切りした後、貼り付け輪高台を有するものである。高台は小さくて低いもので、体部と底部の境近くに貼り付けている。体部外面は回転ナデを施し、底部内面は回転ナデの後、仕上げの不定方向ナデを施している。色調は明青灰色で焼成も良好であり、復原高台径は8.0cmである。

②は、糸切り平高台で、高台は低い。体部内外面に回転ナデを施す。底部内面の見込み部が落ち込むのが特徴である。同様の形態をしたものは、近隣では出石町宮内遺跡出土のものにみられる。焼成は、やや不良で内外面は青灰色、断面は浅黄色を呈し、復原高台径は6.4cmをはかる。

③は、糸切り平底で灰褐色を呈する。一見したところ土師質に近い感じである。胎土は、やや粗く2mm大の長石を含んでいる。内外面とも回転ナデを施すが、特に底部外面のナデは明瞭である。復原底部径は5.0cmをはかる。

これらの椀の時期については、底部の形態によって時期差を示していると思われ、近隣で既報告の宮内遺跡出土のものを参照して考えてみたい。①のヘラ切り後、貼り付け輪高台をもつものは、奈良時代以来の杯の系譜をひく椀と考えられるが、輪高台は繊味で稚拙な感じがする。しかし、後述の糸切り底のものと比べると、時期的にはやや先行するかと思われる。

②は、糸切り平高台のものであるが、同じ糸切り平高台のものでも、



挿図11 平安時代以降の土器・土製品

高台が高く側面を調整する形態のものよりは後出な感じである。

③については、②の糸切り平高台の系譜に連なるものかどうか、類例の増加に期して課題としたい。

個体数も少なく、セット関係も不明なため、ここでは、これらの碗の時期を概ね10世紀から12世紀代に属するものと幅を持たせておく。

2. 黒色土器 (④)

2 G 貝層上面より出土している。内面のみ黒色化し、ヘラミガキを施す。糸切り平高台で、高台側面をしっかりと削るような調整はなく、あまり高くない。胎土は粗で、焼成もあまり。時期は、先の須恵器の碗と同様の時期を考えている。

3. 土師器 (⑤)

各グリッドから出土しているが、図化したのは 2 G 出土の皿である。復原口径11.0cm、残存高2.2cmをはかる。内外面ともナデ調整を施し口縁部から底部にかけて凹んで段をなす。にぶい黄橙色を呈し、胎土に金雲母を含む。焼成は良好。時期は、類例が不明なためよくわからぬが、先述の須恵器や黒色土器よりもやや新しい中世以降のものとしておきたい。

4. 白磁 (⑥)

3 G 黒色シルト層より、下駄と共に出土した白磁碗2片がある。接合しないが、同一個体であろう。底部から高台にかけてのみ残存しており、高台は、やや外開きでケズり出した輪高台である。釉は灰白色ないしは黄色味を帯び、部分的には高台外側面まで薄くかけられている。復原高台径は6.1cmをはかる。時期については12世紀代に属すると考える。

5. 土製品 (⑦)

土製品として獣をかたどったものが1 G 耕作土中より出土した。耳をやや欠損しているが、頭部以上を残している。両耳には径3mmの貫通しない孔を設け、開いた口には玉をくわえている。残存高は3.6cmで、浅黄色を呈し、土師質である。近世以降の遊びの一資料と思われる。

参考文献

- 1) 池田正男・森内秀造『出石・宮内遺跡』出石町教育委員会 1984年
- 2) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978年

第3節 繩文時代の石器

敲石・石錘・磨製石斧・石鎌各1点と石器製作時の石屑細片が多く出土している（図版6、挿図12）。

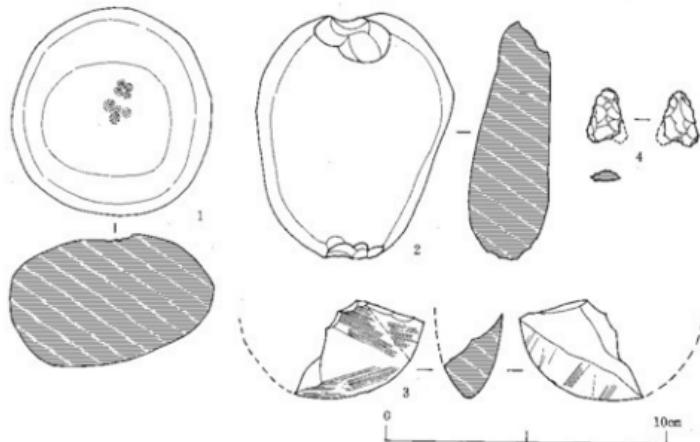
1. 敲石 2G貝層から出土し、玄武岩の円礫で、上下面の中央に敲打痕のある凹みが認められる。長さ7.4cm、幅7.1cm、厚さ4.5cm、重量370g。

2. 石錘 2G貝層から出土し、礫岩の上下を打欠いた礫石錘である。長さ8.6cm、幅6.9cm、厚さ2.8cm、重量194g。

3. 磨製石斧 1G貝層から出土した蛤刃磨製石斧の刃部片で、石材は砂岩である。残長3.5cm、幅4.4cm、厚さ1.7cm、重量20.7g。

4. 石鎌 1G貝層から出土したサヌカイト製の凹基式無茎鎌で脚部を一部欠損する。長さ2.0cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重量0.7g。

そして、石鎌などのサヌカイトによる石器製作時の石屑が1～3Gの貝層より出土している。

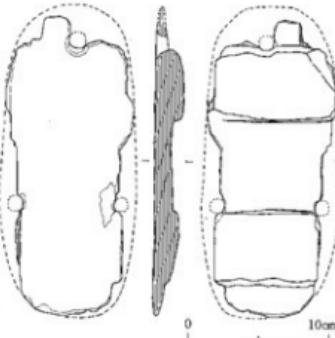


挿図12 繩文時代の石器

第4節 平安時代の木製品

下駄（図版6、挿図13）

3 G の黒色シルト層から出土した。残存状態は不良で、3つの紐穴はすべて一部を欠損している。平面小判形で、約22×10cm程度のものと推定されるが、残存長21.2cm、残存幅9.2cm、残存高は1.4cmを最大ではかる。木取りは征目である。材は、スギを用いている。歯は、ノミを上方から垂直に打ち込み、作り出している。歯の継幅は前後とも5.4cmと広く、全長に占める割合は大きい。歯底部は、かなり磨滅し、特に後歯は激しく磨れ上がっている。白磁碗（挿図11-6）を伴うことから、12世紀代のものと考えられる。



挿図13 平安時代の下駄

第5節 自然遺物

1. サンプル採取と分析方法

貝層のサンプルに関して、湧水が激しいことや調査区が狭いため、層別サンプル方法や柱状サンプル方法をとらず、貝層の状況の概要を把握するために、とりあえず、1・2 Gで調査において出土した貝層コンテナ4箱分を持ち帰り、更に2 Gにおいて6～9層について、移植ゴテではほぼ当量の土壤を板のサンプルとして、持ち帰った。3・4 Gについては、貝層が深く危険であるため一部のみ採集し持ち帰った。以上のとおり、サンプリングの体制や方法は不十分なものであったが、長谷貝塚の様相を少しでも理解しうるようにサンプルとしたものである。

持ち帰ったサンプルについて、風乾せず、直接上から5mm・2mm・1mmの各メッシュを重ねて水洗いを行い、それぞれのメッシュ毎に風乾して分析を行った。5mmのメッシュにて貝類の分類が行われ、2mm・1mmのメッシュでは、微小巻貝、魚骨、種子、石器屑片の採取を行った。¹⁾

2. 分析について

採取した貝類、魚類、哺乳類、爬虫類、種子類について、岡崎・水鶴が分類したものについて、名古屋大学渡辺誠助教授によりご教示を戴いた。また、貝類については、ヤマトシジミとサルボウについて少し計数処理を試みた。

3. 貝類

採集貝は総重量10,916 gで、ヤマトシジミ8,528 g (78.2%) を主体とするもので、サルボウ1,430 g (13.1%)、マガキ897 g (8.2%)、ハマグリ47 g (0.4%)、イボウミニナ11 g (0.1%)、陸産微小貝3 g (0%) に分類される。(図版7、第3表)

第3表 貝類一覧表

分類 地区名	ヤマト シジミ	サルボウ	マガキ	ハマグリ	イボウ ミニナ	陸産微小貝	計(g)
1 G	3,157 (94.6)	93 (2.8)	76 (2.3)	12 (0.4)	0 0	0 0	3,338 (100) %
2 G	5,290 (70.8)	1,332 (17.8)	796 (10.7)	35 (0.5)	11 (0.1)	3 (0)	7,467 (100) %
3 G	81 (73.0)	5 (4.5)	25 (22.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	111 (100) %
合計	8,528 (78.2)	1,430 (13.1)	897 (8.2)	47 (0.4)	11 (0.1)	3 (0)	10,916 (100) %

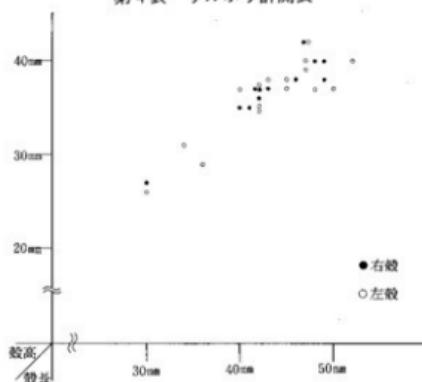
ヤマトシジミについては、完存貝と破碎貝に分け、完存貝1,006点について殻長について5 mm単位に分類した。30mm以上 (3.2%)、25mm以上 (21.1%)、20mm以上 (38.9%)、15mm以上 (22.5%)、10mm以上 (13.1%)、5mm以上 (1.2%) となり15~25mmが60%以上を占める。

サルボウについては、完存貝²⁾28個について右左殻を分け、殻長と殻高とをグラフに表わした(第4表)。右殻が12、左殻が16で、殻長40~52mm、殻高35~42mmが86%を占める。

4. 魚類

2 G貝層中から、タイまたはタイ類の椎骨とフグの歯板と種類不明な魚骨がある。

第4表 サルボウ計測表



5. 哺乳類

2Gや3Gの貝層中から、ニホンジカの頭椎骨・蹄骨・桡骨・臼歯が出土している。1Gや3Gの貝層中からイノシシの下顎犬歯(牙)・臼歯が出土している。イヌまたはタヌキの歯が2G貝層から出土している。

6. 爬虫類

ヘビの椎骨が2G貝層から出土している。

7. 種子類

2Gで行った土壌サンプル中や貝層と3G貝層中から、トチノキ・ノブドウ・サンショウ・ウリ・カラスウリ・マメ・ムギ・コメと湿地に生えるハナムグラなどが出土した。特に2G土壌サンプルの分析から、5~7層の平安時代の土器とコメ・ムギの栽培種がウリやサンショウと出土し、8層貝層において绳文時代後期のノブドウやトチノキの食料植物の種子類が出土している(図版6、第5表)。

第5表 植物遺体一覧表

地区名	分類	トチノキ	ノブドウ	サンショウ	ハナムグラ	ウリ	カラスウリ	マメ	ムギ	コメ	不明
2G 5層										1	
2G 6層					1						
2G 7層	1	1	2	7					1		1
2G 8層	4	1		4							
3G 貝層		1		1		1	1	1			
合計	5	3	2	12	1	1	1	1	1	1	1

註 1) 貝層サンプルの分析については、鈴木公雄他『伊豆子貝塚遺跡』1981年のサンプル分析方法を検討したが、サンプル採取に今回の調査では難点があるため、簡易な方法をとり、今後の参考資料とする。

2) 吉良哲明『原色日本貝類図鑑』1954年によるとサルボウは左殻筋上に顆粒があるので分類できる。

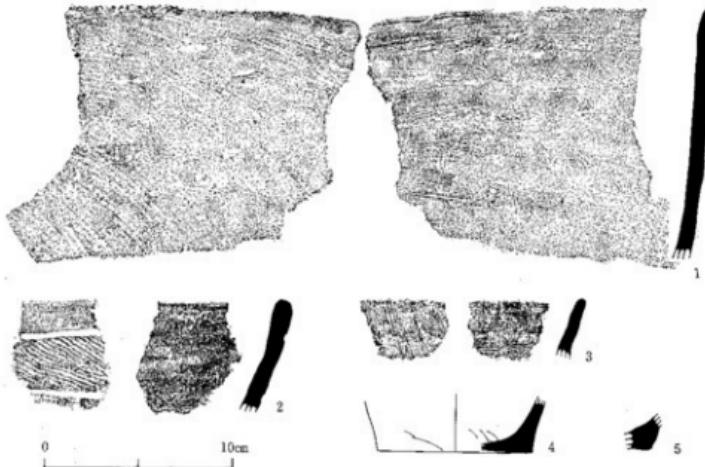
第5章　まとめ

縄文時代の長谷貝塚を理解するには、長谷貝塚周辺の豊岡市・出石町の縄文時代中期から後期にかけての遺跡を検討することと、山陰東部から近畿北部の遺跡を検討することが必要である。また、中津式土器について若干の検討を加えることで、まとめにかえたい。

第1節 近畿北部の縄文時代の遺跡について

ここでは、近畿地方の編年でいう縄文時代中期末葉（北白川C式）から後期初頭（中津式）にかけての主な遺跡の分布を取り上げてみる（挿図15）。山陰東部鳥取市桂見遺跡(1)、兵庫県美方郡浜坂町池ヶ平遺跡(2)、豊岡市辻遺跡(3)、城崎郡日高町山の宮遺跡(4)、神鍋遺跡(5)、豊岡市中谷貝塚(6)、香住・荒原貝塚(7)（図版8、挿図25）、長谷貝塚(8)、京都府与謝郡網野町浜詰貝塚(9)、柳谷口遺跡(10)、丹後町平遺跡(11)、大宮町裏陰遺跡(12)の12遺跡である。

断続的ではあるが、核となる遺跡は池ヶ平遺跡、神鍋遺跡、中ノ谷貝塚、平遺跡がある。中



挿図14 香住・荒原貝塚出土縄文土器（豊岡市立郷土資料館蔵）

期末～後期初頭に盛る桂見遺跡、柳谷口遺跡があり、中津以降を中心とする遺跡は山ノ宮遺跡、香住・荒原貝塚や長谷貝塚がある。

ここで、A. 神鍋遺跡を中心とした山ノ宮遺跡、辻遺跡、B. 中谷貝塚を中心とした長谷貝塚、香住・荒原貝塚、C. 浜詰貝塚中心とした柳谷口遺跡等の土器群を比較してみることにしたい。¹⁾

中期末の北白川C式4期、深鉢C類に特徴をもつ、桂見遺跡や、独特の紡錘文がみられる浜詰貝塚や平CⅢ式や平KⅠ式や柳谷口遺跡には、充填縄文はR_{1/2}とL_{1/2}が半々位で使用されるが、後期前葉以降へつながる但馬の山ノ宮遺跡、辻遺跡、長谷貝塚ではR_{1/2}の縄文で充填するものが多い。一方、長谷貝塚では無文土器の二枚貝の貝腹縁による条痕を施すことが多いのも、神鍋遺跡周辺とは異なる。



插図15 近畿地方北部の縄文時代中期末～後期初頭の主な遺跡分布図

第2節 中津式について

縄文時代後期初頭の中津式土器の精製土器の成立について、泉拓良氏は近畿地方中期末葉の北白川C式4期、深鉢C類の器形と文様構成の検討から口縁部文様帯と胴部文様帯との区別が²⁾なくなり、屈曲が消滅し、退化し一体化することに求めている。

今村啓爾氏は、中期末葉を仮に平式とし、中津式について、沈線だけで文様を描くものがあるが、沈線間に充填縄文が盛行する土器として把え、中津Ⅰ・Ⅱ式に分ける。中津Ⅰ式は口縁部文様帯に窓枠形の区画を有するもので、小さい渦巻が重ねられる。中津Ⅱ式は口縁部文様帯が退化し、沈線の幅が狭くなり、縄文帯と無文帯をくりかえし重ねる。³⁾

一方、沢下孝信氏は中津式土器を検討するに、中津式の主要文様の1つであるO字文の検討を加え、中津I式とII式では、棒状モチーフの消失、直線化、渦文の萎縮、縄文部と無文部の反転に変化をみいだしている。⁴⁾更に、玉田芳英氏は中津I式を古・新に二分し、口縁部文様帯が上方へ移り、窓文の消

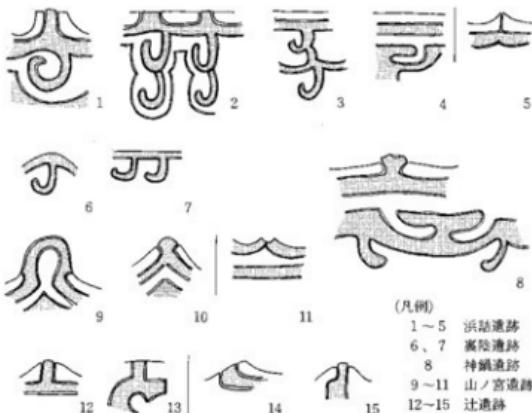


図16 近畿地方北部における中津式土器文様概念図

滅や磨消縄文の完成及びJ字文の成立と盛行することを理由としている。J字文の成立は紡錘文や渦文の変化と把えている。中津I式古段階の土器を布留遺跡、日羽建行田遺跡、右近次郎遺跡、東庄内遺跡SK15、裏陰遺跡の資料をあてている。中津II式は横方向の縄文が縦に更に口唇部が肥厚して、そこに刻むなどの特徴をもつ。⁵⁾

ここで、長谷貝塚の縄文後期土器をみると、幅3~4mmの沈線2本で文様を描き、直線化しており、沈線間の縄文充填も15~25mmから6~10mmとの2類型があり、広いものを中津II式、狭いものを後次的に把え、福田KII式へ移行段階ととらえる。中津II式の文様は山形口縁の頂部から2条の太い沈線が垂下し、左右に口縁部が平らになるように広がり、下方に渦文からJ字文を描くものである。沈線間はR¹⁶を主とする縄文で充填する。浜詰貝塚の資料と類似し、神鍋遺跡(朱塗土器)や山の宮遺跡のバラエティーを生み出し、辻遺跡や浜詰貝塚の新しいものや裏陰遺跡の新しいものへと文様が退化していく(挿図16)。

特に、中津II式でも古式の感じを残し1条の沈線による退化した渦文を描き、2条の沈線で区画された約40mmの幅広の空間を15~25mmの通常の空間を描出している。

以上、中津式について概略を述べたにとどまり、今後に資料操作の機会を得たい。

第3節 縄文人の生活

長谷貝塚での縄文人の生活ぶりを復原してみると、2.8km離れた中谷貝塚を出自するかのように、縄文時代時期に香住・荒原貝塚と共に存している。香住・荒原貝塚は長谷貝塚と指呼の位置(0.8kmの距離)にあり、長谷貝塚の出村的性格をもつものである。

中谷貝塚周辺の低地の調査で判明したように、貝塚の近くに自然貝層が認められている。⁸⁾春から夏にかけては、貝塚の近くの砂泥性の浜に出て、ヤマトシジミやサルボウとハマグリやマガキを探り、海に出てタイ類やフグを釣る。秋には山の幸のノブドウやトチノキの実などを採り、秋から冬にかけては、弓矢を用いて、ニホンジカやイノシシを求めて狩りを行っていた。⁹⁾四季のくりかえしの中で、目的に応じた道具（土器・石器・骨格器）¹⁰⁾をつくり、破損したものは貝殻と共に捨てられた。それが貝塚として遺されている。

今回、小規模の発掘で貝塚の一部を調査した中で、貝層と土壤の中から歴史を拾い集めることができた。埋没している低地の遺跡への保存策を講じ、今後、長谷貝塚を始め遺跡の保護がなされることを望むものである。

- 註 1) 資料の一部であるが、日高町神鍋在住の和田長治氏をはじめ豊岡市教育委員会、日高町教育委員会の協力により、実見の機会が得られた。
- 2) 泉は文献3・4に北白川C式から中津式成立の様相を述べられている。
- 3) 今村啓爾 「称名寺土器の研究（上・下）」『考古学雑誌』63巻1・2号 1977年
- 4) 沢下孝信 「中津式土器について」『野多目古墳跡』 1983年
- 5) 横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査会『称名寺式土器研究会資料』1986年を引用。また、「丁」字文の成立については、丁・柳ヶ瀬遺跡資料にも、満巻文が他の曲線文について横走の「丁」字化する傾向がある。岡崎他『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』1985年
- 6) 発掘調査資料で公表されているものは少く、今回は和田長治氏採集資料を参考とした。
- 7) 日高町教育委員会保管資料及び和田長治氏採集資料がある。
- 8) 豊岡市教育会が神戸市立教育研究所前田保夫先生の協力のもとに、昭和62年秋に調査を実施。中谷貝塚から約150mの地点で、水田下1.7mのところにマガキ・ヤマトシジミを中心とした自然貝層を発見し、貝層の直上や一部の貝層中に縄文後期後半から晩期中頃の土器片が出土している。
- 9) 貝層出土の自然遺物から生活の復原を試みたが、縄文時代の食料の主となすものは採集植物である。貴重な、蛋白源として季節に応じて、漁撈・狩猟を行う。
- 10) 昭和61年度中谷貝塚の調査でヤマトシジミを中心とする貝層中に、トチノキ・ドングリの植物遺体とクロダイ・タイの魚骨、鳥骨、シカ・イノシシ・タヌキの獣骨、歯と石斧・石鎌・石皿・敲石・凹石・磨石・石錘の石器と骨格器ヤスが出土している。

参考文献

1. 「豊岡市史」上巻 1981年
2. 「出石町史」第3巻 1987年

3. 泉拓良「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集』 日本原始 1979年
4. 泉拓良他「京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—」 1985年
5. 中山修宏他「桂見遺跡発掘調査報告書」鳥取市教育委員会 1978年
6. 石野博信「縄文時代の兵庫」 1979年
7. 和田長治他「半坂峠古墳群・辻遺跡」 1983年
8. 阿久津久他「山の宮遺跡発掘調査報告書」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』 2 1974年
9. 藤井裕介他「神鏡山遺跡」 1970年
10. 天野末喜他「京都府由良川流域における縄文文化一分布調査による報告 1—」『同志社考古』 8 1971年
11. 杉原和雄「表陰遺跡発掘調査概報」 1979年
12. 堅田直「京都府丹後町平遺跡発掘調査概要」 1966年
13. 岡田茂弘「京都府浜詰遺跡発見の堅穴住居址」『先史学研究』 1 1959年

付載 長谷貝塚出土下駄の樹種

京都大学名誉教授 島地 謙

京都大学木材研究所 林 昭三

兵庫県豊岡市長谷貝塚出土の下駄1点について樹種の同定を行った。長谷貝塚は縄文後期初頭の貝塚であるが、本資料は貝層直上の黒色シルト層から平安時代の中国製白磁や須恵器、土師器片と共に出土したものである。

顕微鏡観察のための切片作製に際しては、資料に与える傷を最小限度にとどめるため、安全カミソリの刃を用いて、資料そのものから直接木口、柾目、板目の三断面の徒手切片を採取した。採取した切片は常法に従ってビオライトにより封入して永久プレパラートを作製し、普通光および螢光による顕微鏡観察を行った。

顕微鏡観察によって認められた特徴は次の通りである。

晩材の幅はかなり広い。垂直・水平樹脂道を欠く。樹脂細胞は早・晩材の境界ないしは晩材部に接線方向に並ぶ傾向がある。放射仮道管を欠く。放射柔細胞の壁は薄く、分野壁孔は細胞壁が劣化しているため普通光顕微鏡では観察できなかったが、螢光顕微鏡観察により典型的なスギ型で1分野に1~3個(普通2個)存在することが確かめられた(図版9-4参照)。

以上の所見から、本資料の樹種はスギ *Cryptomeria japonica* D. Don (スギ科) と同定された。図版9-1~3に本資料の木口、柾目、板目切片の顕微鏡写真を、また図版9-4に柾目切片で観察した分野壁孔の螢光顕微鏡写真を示した。

なお、本資料切片のプレパラートは京都大学木材研究所の材鑑調査室に保管されている。

図 版



長谷貝塚空中写真（昭和42年撮影）



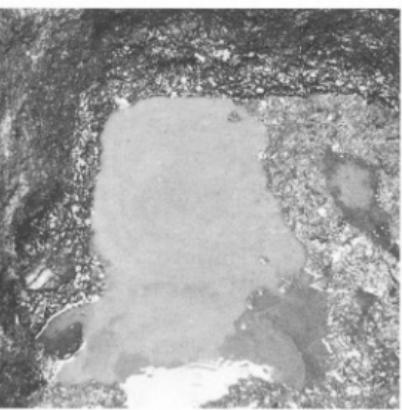
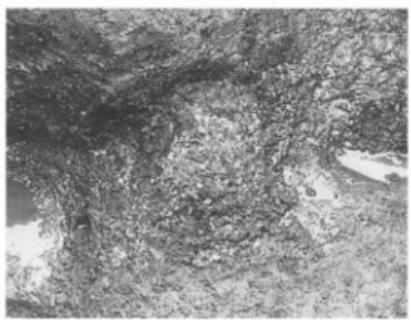
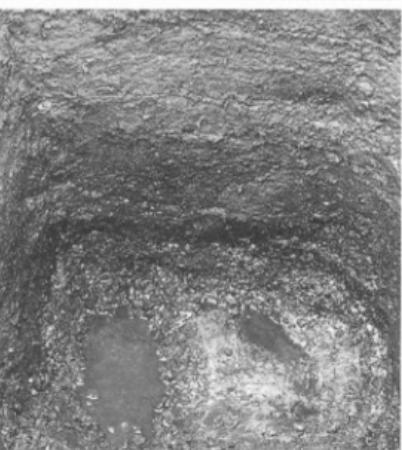
1
2



長谷貝塚と発掘調査

3 | 4
5

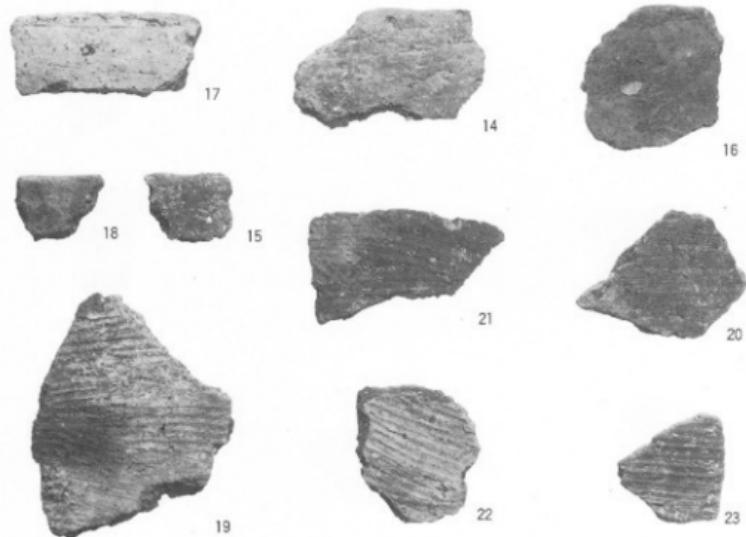
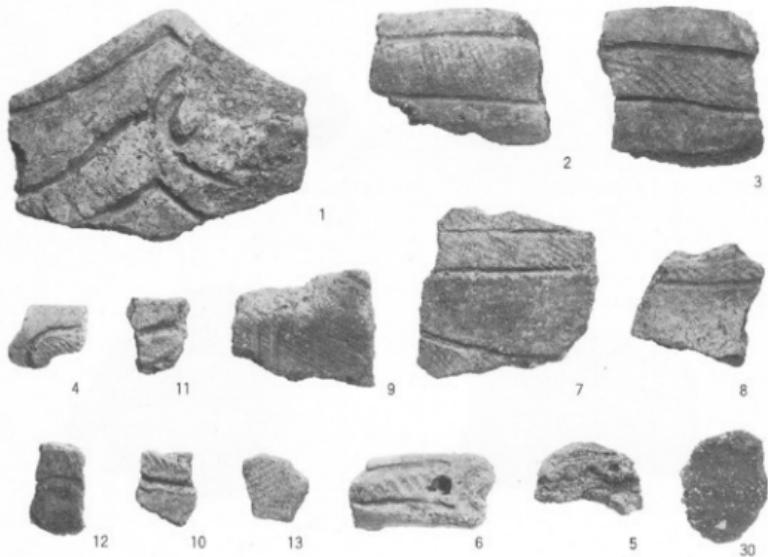
1. 遠景
2. 近景
3. 調査位置
4. 1G調査風景
5. 2G調査風景



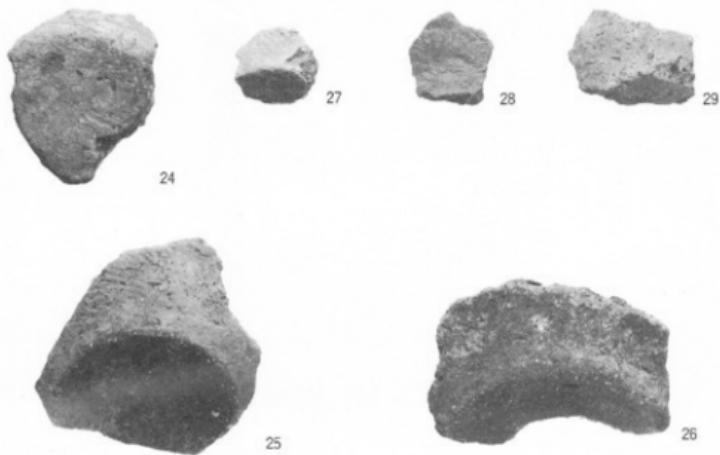
土層と貝層

$\frac{1}{2}$ $\frac{4}{5}$
 $\frac{2}{3}$ $\frac{5}{6}$

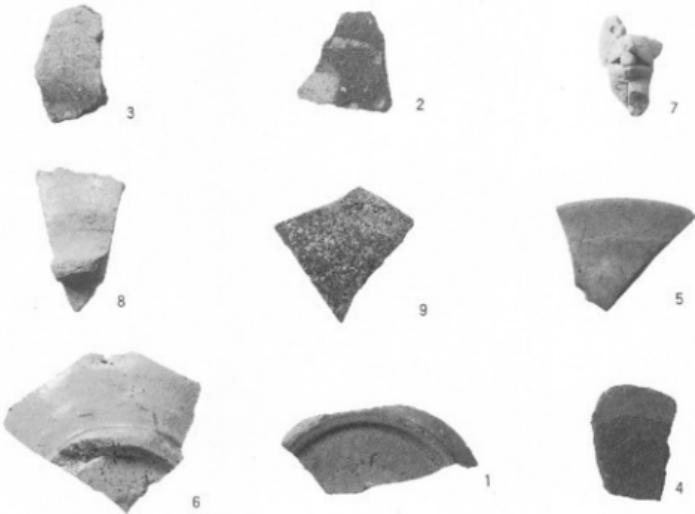
1~3は1G
4~6は2G



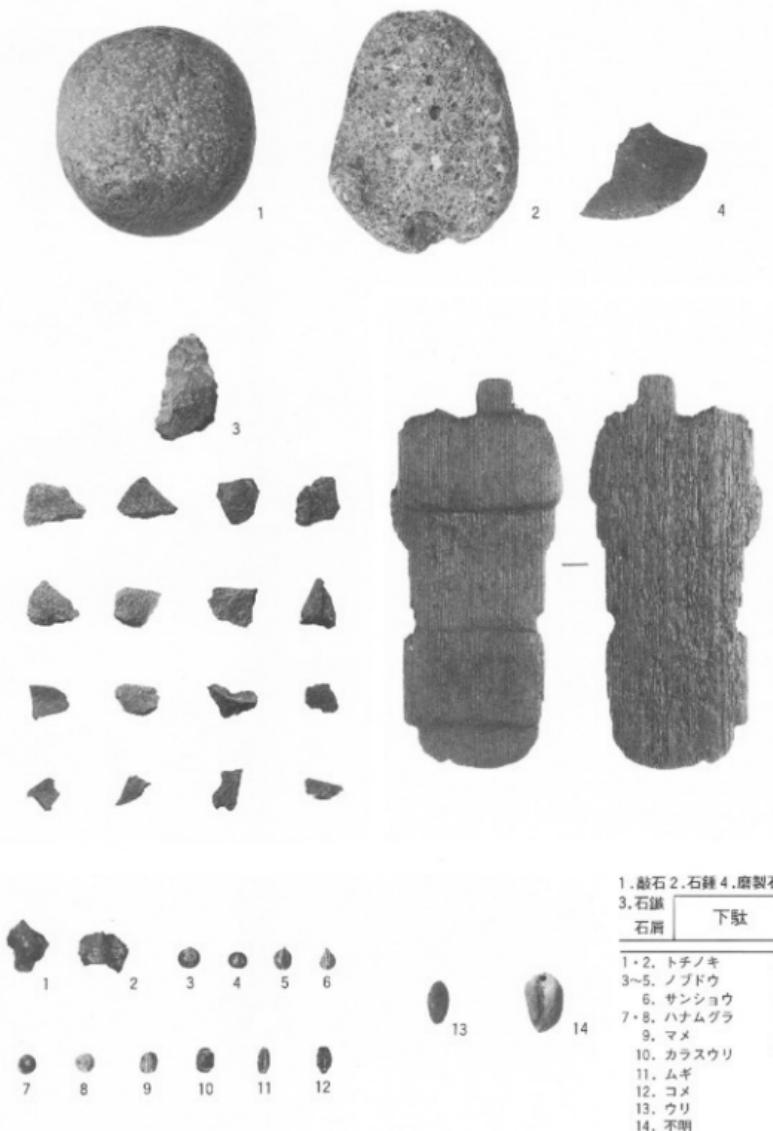
縄文土器
— 1 — 有文土器
— 2 — 無文土器



1. 繩文土器 底部



2. 平安時代以降の土器・土製品



石器・木製品・種子類



貝類・哺乳類・爬虫類・魚類

マガキ(2) サルボウ(2)

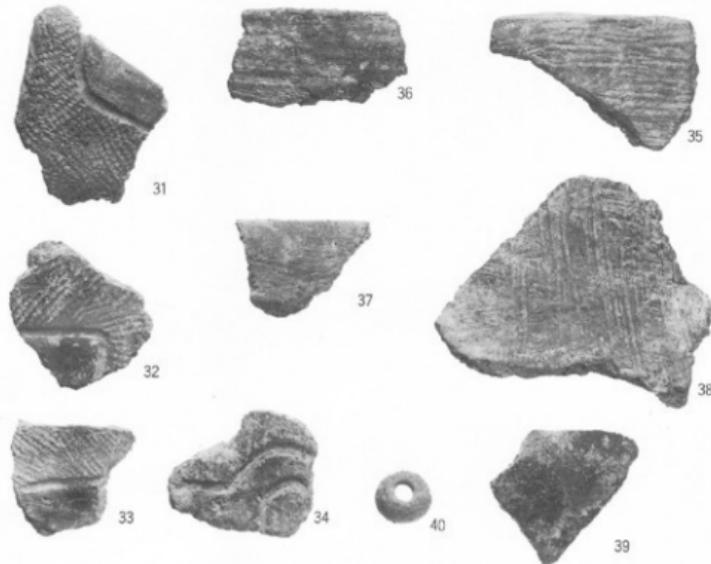
イボウミニナ(3) ヤマトシジミ(4)

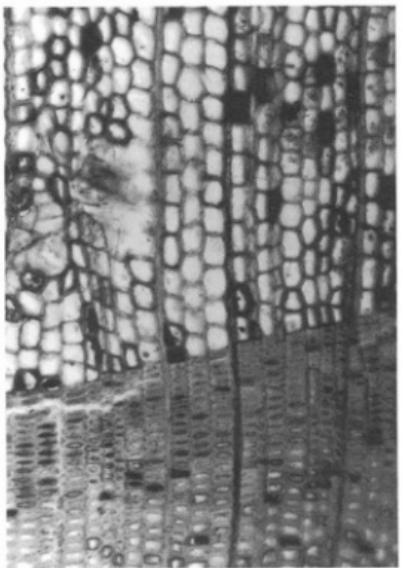
ハマグリ(2) 隆腹微小貝(4)

ニホンジカ(臼齒2) イノシシ(臼齒2) イヌ又はタヌキ(臼齒) ヘビ(椎骨)

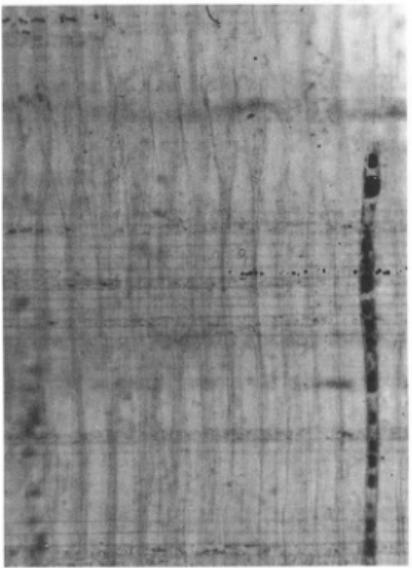
タイ(椎骨2) フグ(歯板2) 不明

ニホンジカ(頸椎骨・蹠骨・枕骨) イノシシ(下顎犬齒)

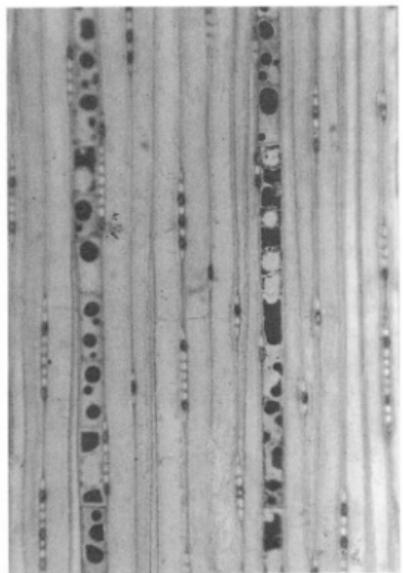




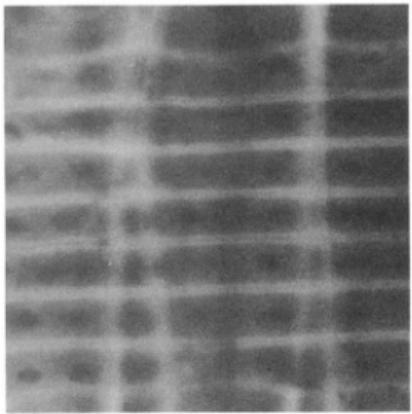
1. 木口 $\times 100$



2. 柱目 $\times 100$



3. 板目 $\times 100$



4. 柱目 $\times 600$ (螢光顕微鏡写真)

下駄の樹種(スギ)顕微鏡写真

兵庫県文化財調査報告書第61冊

長谷貝塚

昭和63年3月20日印刷

昭和63年3月30日発行

編集・発行 兵庫県教育委員会

神戸市中央区下山手通5丁目10-1

〒650 TEL. (078) 341-7711

印刷・製本 丸山印刷株式会社

兵庫県高砂市米田町神爪57-1

〒676 TEL. (0794) 32-1511